
東方夢亡録

生死不明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢亡録

【Nコード】

N5961Z

【作者名】

生死不明

【あらすじ】

自分の生きている人生に絶望した少年。

そんな少年は生きることを諦めこの世を去ろうとする。

だが、次に気が付いたときには少年は自分のいた世界には居なかった。

そう彼が居たのは幻想郷だった。

さらに、彼は自分の記憶を忘れていた。

そんな少年が過ごす幻想郷でのお話……。

皆さんに少しでも楽しく読んでいただけたら嬉しいです。

プロローグ「全ての始まり」(前書き)

グダグダ感が・・・

プロローグ「全ての始まり」

くだらない・・・

この世界が本当にくだらない・・・

信じてしまっから・・・

信頼してしまっから・・・

感情があるから・・・

心があるから・・・

友がいるから・・・

家族がいるから・・・

裏切られたときに辛くなり、悲しくなり、孤独を感じ、

そして・・・

立ち直れなくなる

「もう嫌だ・・・」

声を出して余計に悲しくなってくる

自分の存在の意味・・・

とある人は「生まれてきたからには、何らかの使命を背負っている」と言った

それなら自分は何のために生まれてきたんだ？

俺の周りで起こった数多くの事件・・・

どれも偶然とは言えないような不可思議な事件

もし神がいるとすれば神は俺をただ苦しめたいのだろう

周りの人間の命を弄び、簡単に奪っていく

拳句の果てには、周りの人間は俺のことを「不幸の人間」「災厄をもたらす疫病神」

他にも色々な呼び方をされた

そのたびに胸は苦しくなるし、生きているのが辛くなる

そんな俺が取れる行動は一つ

全ての人に平等に与えられた「死」

全ての生き物には必ず死が訪れる

ただその訪れ方は分からない

事故で、殺害で、寿命で・・・

他にも色々ある

俺がそんな中から選ぶ『死』は

『自殺』

おそらく『死』というやり方で一番簡単な方法だと俺は思う

自らを殺すだけなのだから・・・

でも、人間は強欲で死に方さえも選びたがるらしい

俺は人に見られて死ぬのは嫌という思いから森にいた

この森は地元でも有名で別に樹海というわけではないが、意思の無いものが入ったら二度と帰って来れなくなるという言い伝えがある

今の俺にはピッタリな状況だと思う

生きる希望も力さえも無い俺が入れば帰ってくることは出来ないだろう

だから俺はその森に一步足を踏み入れた

その瞬間背筋が凍るような感覚が襲ってくる

体に鳥肌が立った・・・

恐怖を感じると同時に喜びも感じた

それから少年は歩き続けた

ただ、まっすぐ歩き続けた

自分の使命を終えるために・・・

「お・・・、・・・きな・・・い」

体を強く揺すられる。

せつかく人が気持ちよく眠っているのに、一体何なんだ？

「起きなさい！」

ボコッ！

「痛っ！一体何なんだ！？」

頭に痛みが走り飛び起きてしまった。

「やっと起きたのね。全くこんなところで寝てると餓死するか妖怪にでも食べられるわよ?」

目の前にいたのは、銀髪でメイド服を着ていて瞳が赤色という変わった女性が立っていた。

(あれで起こされたのかな?)

ただでさえ変わっているのに手には銀のナイフを持っていた。

「妖怪に食べられるのはともかく、餓死は望んでいることだけど?」

俺がそう答えると、俺を起こしてくれた? 女性はにっこりと笑い・

「そう・・・貴方死にたいのね。だったら此処で私が殺してあげるわ!」

笑顔でナイフを俺の喉を目掛けて刺してきた。

「な!?!」

俺はとつさに体をひねりながら起き上がった。

「あら? 何で避けるのかしら? 貴方死にたいんでしょう?」

「人に殺されるのはごめんだ!」

俺は叫びながら答えた。

だが、女性は不思議そうに

「別に死んだら同じじゃないの？」

と答えた。

「そんなわけないだろ！人の死に方によっては悲しまれるし同情もされるじゃないか！」

「貴方は悲しまれたり同情されたりしたいの？」

「ッ!？」

目の前の女性にそう言われたとき俺はすぐに「そんなことはない！」
と言い返すことはできなかった。

「どうして貴方はそんなに死にたいの？」

そんな当然の質問に俺は首を傾げてしまった。

どうして俺は死にたいんだ？

分からない……。

自分が死にたがっていた理由が分からない。

「まあいいわ。それより、貴方外来人よね？」

目の前の女性はいきなり俺のことを「外来人」と呼んできた。

「外人って何なんだ？」

「外の世界から来た人のことを言うのよ。貴方は、ここが何処かわかる？」

俺はそう言われて周りを見回した。

周りの景色はよくありそうな田舎の田んぼ道のような場所だった。

今まで目の前のことで夢中になっていたが周りの景色には見たことのない景色が広がっていた。

そして、俺の知る限りでは、あの森の近くにはこんな場所は無いはずだ。

「ここは、何処だ？俺は森にいたはずじゃなかったのか？」

「ここは、げんそくきょう幻想郷よ。外の世界で忘れられた物がたどり着く場所よ」

「幻想郷？ここは日本じゃないのか？」

いきなり聞いた事もないような言葉に戸惑いを覚えてしまう。

「そのニホンって言うのは多分、外の世界のことね。だって、ここは外の世界から結界によって隔離されているのよ」

「外の世界」「結界」自分が今までいた場所では中々聞くことのない単語が飛んできた。

「じゃあ、俺は外の世界からこの幻想郷って所に来たのか？」

「そうなるわね。でも不思議ね。貴方はどうやって来たの？」

「それは・・・」

（思い出せない。俺はどうしてここにいるんだ？）

最後に覚えているのはただ歩いている事だけだった。

だがどうして歩いていたのかも思い出せない。

でもそのことを思い出そうとすると胸が痛くなる。

「覚えてないのね。でも、この幻想郷に来る方法は二つしかないのよ」

「その方法は？」

「一つは貴方が忘れられた存在になること。もう一つはスキマ妖怪が連れて来ることかしらね。もっとも、可能性としては、スキマ妖怪のほうが高いけど」

「妖怪」さつきから何度かは聞いていたが、とても信じれなかった。

「妖怪って本当にいるのか？」

「いるわよ」

きつぱりと言いつられた。

だが、証拠もないし小説やマンガのようなことを言われても信じれるはずもなかった。

「でも、どうやって信じると？そんな空想のようなことを言われても疑うことしかできないんだが……」

「信じなくてもいいわよ。ただ今、貴方の身に起きていることが嘘といえるのならね」

確かに今俺の身に起きていることは、彼女の言うことを当てはめると納得できる点がある。

周りの景色が変わったこと。

少なくとも俺の地元にはこんな場所は無かったはずだ。

この忘れられたがどのようなことを指すか知らないが、少なくとも最近俺自身が自分のことを忘れていた気がする。

「……いくつかは信じるが、妖怪のことはまだ信じないからな」

「なら、証拠を見せてあげましょうか？」

いきなり、そんなことを言ってきて驚いてしまう。

「お前は妖怪にでも知り合いがいるのか？」

「少しなら知り合いもいるわよ」

「・・・・・・・・」

妖怪に知り合いがいると聞いて唾然としてしまう。

(こいつはもしかして、頭でもおかしいのか?)

俺の中の妖怪は手がたくさんあったり、顔が二つあったり、かなり大きかったりするイメージがあるんだが・・・

「多分、貴方が思っているような妖怪はいないわよ」

心を読まれたように言われてしまった。

「じゃあどんな感じなんだよ?」

そう聞くと彼女は少し悩み、そして

「ん〜・・・女の子?」

「は?」

思わずポカーンとしてしまう。

「だって、答えるって言われても、女の子しか言えないんだもの」
彼女は少し困っていた。

そして、自分の持っていた妖怪というイメージがどんどん崩れていった。

「お前の頭は大丈夫か？それとも俺の頭がおかしいのか？」

「ここでは、外の世界の常識はあんまり通用しないわよ」

「……つまりここでは、常識に囚われてはいけないということか？」

「……だったら、妖怪が女の子っていう証拠を見せてくれる？」

そついうと彼女はまた少し悩み

「……わかったわ。ちょうど時間もあるし妖怪でも探してみましようか」

そついうと彼女は歩きだした。

それもかなりのペースで……

「ちよつ、歩くの早いつて」

「あら、そつかしら？私はこれくらいが普通なのだけれど？」

これくらいが普通つて、早歩きのオリンピックでも出るきかよ。

「少しはペースを落としてくれ、あんたに追いつける気がしない」

「仕方ないわね。でも、時間があるつていっても少ししかないから急ぐことに変わりはないわよ」

彼女がそついうと、歩くペースは少しだけ落ちた。

(これなら何とか追いつけそうだな)

「あ、そういえば自己紹介がまだだったわね。私は十六夜咲夜いそひやくしや、普通のメイドをしているわ。貴方の名前は？」

俺の名前……。

誰にでもあるはずの名前が思い出せない。

いや、それよりも自分の過去が思い出せない。

「……だめだ。名前が思い出せない」

「もしかして記憶喪失かしら？こっちに来た時に忘れてしまったのかしら？」

いくら頑張っても思い出せない。

自分の大切な名前が……。

でも、俺は学生だったという知識だけはなぜかある

「名前は思い出せないが、外の世界では学生をやっていた」

学生ということを見ると、十六夜は首をかしげながら質問をしてきた。

「ガクセイ？それは、どんなものなのかしら？」

「学生ってのは特定の場所に行ってそこで勉強とかをする場所だよ」

「ふーん。寺子屋みたいなものね」

寺子屋って、いったい何時の時代だよ。

「それより、今から会う妖怪ってのはここから遠いのか？」

「大丈夫よ。徒歩で30分ぐらいの場所よ」

「30分って結構遠いイメージがあるんだが・・・」

「あら、そんなことないわよ。幻想郷こゝろじゃそんなこと当たり前よ」

そついい十六夜はどんどん歩いていった。

俺は全く知らないこの幻想郷を・・・

そして、この世界に何があるのかと期待している俺がいた。

今までは期待したことがない俺が未知のことに期待を隠せないでいた。

自分の記憶が失っていることがどうでもよくなるくらいに。

そして、これから起こることに・・・

ブローグ「全ての始まり」(後書き)

誤字脱字がありましたらご報告お願いします。
また、意見や感想なども待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5961z/>

東方夢亡録

2011年12月19日22時51分発行